

〔特集：香港の過去と現在〕

東亜同文書院生の香港観察にみる「アジア主義」

——対イギリス認識を中心に——

Hong Kong from the Changing “Asianism” Viewpoint of Toa Dobun Shoin Students

加納 寛

KANO Hiroshi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: kano@aichi-u.ac.jp

Abstract

The purpose of this paper is to trace the changing view of the relationship between Japan, Britain and China in Hong Kong seen by Toa Dobun Shoin students, and pursue changing “Asianism” of Japanese young men.

Down to the mid-1930s, these students had seen Hong Kong as the distinguished results of British rulers’ abilities and efforts in spite of *Wu-san-shi* Incident and *Shaji* Incident in 1925. “Asianism” could not be observed in the students’ documents in this period. However, from the mid-1930s, critical viewpoint toward British-dominated Hong Kong appeared and increased in the documents of the Japanese students. The change took place against the background of the extension of Japanese influence in China and the growing “Asianism” among Japanese students.

はじめに

近年、東アジア情勢の急展開を受け、「アジア主義」に対する関心が高まっている。井上は現在の日本における「さまざまな「アジア主義」を紹介し、1930年代の「アジア主義」の「現在性」を強調している（井上 2016）。「アジア主義」とは、竹内によれば「その千差万別の点がむしろアジア主義の特徴である」とされるが（竹内 1993: 292）、最小限の属性として「アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の志向を内包し

ている点」に共通性を有しているとされる（竹内 1993: 294）。ただし、近代日本の「アジア主義」については、竹内は野原による「欧米列強のアジア侵略に抵抗するために、アジア諸民族は日本を盟主として団結せよ、という主張」という定義（野原 1960: 6）を採用している（竹内 1993: 289）。松浦が指摘するように、1930年代から「大東亜戦争」に至る時期の「日本の基本的動向の一つは、アジア主義と南進であった」（松浦 2007: 1）。松浦らは、台湾・華南・東南アジアといった地域から、「昭和におけるアジア主義が果たした政治的機能」を解明しようとしている（松浦 2007: 3）。

では、「満洲国」成立以降、「日本国内で大きなうねりとなった」という、「反英を中核とする反西洋帝国主義と、英国などを頼りとし抗日を続ける蒋介石政権の壊滅を目的とする大亜細亜主義」は（松浦 2007: 6）、思想家でも政府高官でもジャーナリストでもない、上海に学ぶ日本青年¹⁾としての東亜同文書院生たちの記録において、どのように観察されるだろうか？ 書院生が学んだ上海に並んでイギリス人・中国人・日本人が活動した大都市、香港は、書院生が「大旅行」²⁾においてほぼ毎年、約35年間にわたってコンスタントに訪れた一大拠点であったため、大旅行の記録から20世紀前半における書院生への「アジア主義」の影響や変容を捉えやすい。本稿では、このような視点から、書院生を見た日本と中国、そしてイギリスとの関係に関する認識を反映させやすいと考えられる香港に関する『東亜同文書院大旅行誌』（以下、『大旅行誌』と記す）の記述を取り上げ³⁾、その変化を跡付けてみたい。

1. イギリス香港植民地支配の賛美：大正期～昭和初期

大正期の『大旅行誌』に記された書院生の対イギリス認識は、塩山のまとめとおり、「南方の自然豊かな一島嶼を、わずか数十年で、上海に並ぶ東洋第一の都市たる「香港」とし

1) この時期における日本の対英イメージについては、多くの先行研究が存在するが（たとえば細谷 1982や白井 1982など）、その多くは政府要人や外交官、ジャーナリストなどの対英イメージによるものや、彼らによるイメージ操作に関するものであり、一般的な日本人の対英イメージについては必ずしも明らかにはなっていないようである。本稿で扱う東亜同文書院生は、「一般的な日本人」とはいえないものの、当時の日本人青年の感覚を共有している部分も大きいと考えるものである。

2) 「大旅行」とは、書院生が最終学年に少人数の班に分かれて数か月間にわたっておこなった調査旅行であり、その足跡は中国各地から東南アジアなど、広範囲に及ぶ。その成果は、卒業論文として『調査報告書』にまとめられた。大旅行の全体像については、加納編（2017）を参照されたい。また、香港への大旅行については、塩山（2017）を参照されたい。

3) 『大旅行誌』は、大旅行の旅行記であり、大旅行から帰還後の書院生によって執筆され、東亜同文書院によって毎年刊行された。愛知大学によって2006年にオンデマンド版が復刊されている。本稿では、『大旅行誌』からの引用に際しては、（大旅行誌 オンデマンド版巻番号：ページ番号）と記載することによって示す。

て創造し得たイギリス人の英知、意気、努力に感嘆し、尊敬の念を抱いている」ものであった（塩山 2017: 163）。中国人やそのコミュニティに対しては「マイナスイメージの記述が多い」が、一方で「中国人のしたたかさを肯定的に捉え」た記述も多々見られるという（塩山 2017: 160-161）。日本人については、優越的な記述は見られないという（塩山 2017: 159）。本節では、塩山の観察した時期の後である大正後期から昭和初期にかけての対イギリス認識を見ていきたい。

1916年に香港を歩いた14期生は、香港を「憧憬の的」、「東洋のロンドン」、「旅路の夢にも幾度か絵かれし」、「天女が置き忘れたるが如き此現世の美観」として、いささか夢見心地に描いている（大旅行誌 10: 452）。イギリス人の統治についても、「彼英人の気魄の大！ 量の広！ 英人足跡を印せる処何れの天涯たりとも小英帝国樹立せずんば止まぬ意気概誠に讃嘆に堪へず」と称揚し、翻って「我新領土遼東青島に青山の鬱々たるを見るは果して何時ぞ！」と日本の植民地統治の先行きを慮っている（大旅行誌 10: 454）。

1917年に香港を見た15期生も、「少くも余に映ぜし香港は、余りに人工的に、余りに拘束的で、且つ毛唐臭く、一種圧迫さる様な感に打たれ」ながらも、「文明てふ空気が、此孤島を蔽ふてより七十年足らずにして、英国人の努力及成功を語る好個の紀念」、「街路整然」、「清潔に家屋亦宏壯にして諸般の設備整頓せり」と評価している（大旅行誌 11: 288）。

16期生は、「偉観あれどもバターの臭徒らに高くして横文の広告と看板に弾丸黒子の地なりとは云へ、一切万事牛じられて居るのは糞の種」というが（大旅行誌 12: 286）、これはイギリス支配に対する嫌悪感を表明し、日本の影響力の小ささを憂いた、プリミティブな「アジア主義」的感覚の現れと見ることもできよう。

1922年に香港を訪れた20期生も、「絵の様な理想的な港を俯瞰する時英人の鋭眼と建設に拂った国民的努力性を思ふ」、「英人は恐ろしい力を持つてゐる」とし（大旅行誌 15: 428）、「整然たる市街を見た時」、「バンドに佇んでその完備してゐる大港湾を眺めた時」、「神もなすことの出来ぬ大進歩をなさしめた英国人の植民地に於ける不断の努力に寧ろ敬虔の念を抱かずにゐられなかつた」と感嘆している（大旅行誌 15: 433）。

1923年に大旅行に出た21期生は、「流石は理智に富む英国人が畢生の腕を振つて築き上げた東亜の一大根拠地」、「文明は自然を征服すと云ふが蓋し至言」、「実際香港は東洋第一の商港たるに恥ぢない」、「英人の鋭眼と之れが建設に拂つた偉大な努力が思はれる」と記述しており（大旅行誌 16: 520）、大正期の書院生はイギリスの香港における植民地統治手腕を手放して称賛しているといえよう。日本については、イギリスの植民地経営を見習うべき存在として描かれる。また、中国人はイギリス人に従属するだけの存在として描かれているといえる。

大正期の上述のようなイギリス植民地経営賛美は、1925年の五・三〇事件の波及によつ

て香港において対英ゼネストが1年半にわたって起こり反英機運が高まった大正末期から昭和初期においても⁴⁾、継続して見られる。

1926年に大旅行に出た23期生は、「従前には数人の漁師によつて占められてゐた住所が、今では香港商業の大中心地であり、英国東洋政策の根拠地に一変した香港の壮大さに感嘆し（大旅行誌 18: 44）、翌年に香港を訪れた24期生も「かくまで文化設備を施してゐる英国の努力の跡」を見て（大旅行誌 19: 411）、「大英帝国の帝国主義の如何に雄大なるかを讃嘆せざるを得」ず（大旅行誌 19: 61）、「官民一致、堅忍不拔の精神」、「そこに大英国民の特性、偉大さが」あり、「大英国の偉大を讃美させられる」と（大旅行誌 19: 521）、依然として手放しのイギリス賛美を続けている。

こうしたイギリスの植民地経営は、「仏国の膨張政策——東洋に於ける仏領印度支那、——安南の天恵無限の沃土が、茫々として雑草の蔓るにまかせてゐる」のと比較して、イギリスが「帝国主義を利用し善用し、その基礎を世界各地に求め維持し得たものは、世界を家とする雄渾な気魄の故で」あり、「大英国の雄大さ」を実感するものであった（大旅行誌 19: 547）。それはまさに、「東洋の楽園香港の壮観」（大旅行誌 20: 127）を築き上げたイギリス植民地経営への賛美であった。

このように、1925年の五・三〇事件を通して、この時期までの書院生の対イギリス認識は必ずしも悪化していない。もっとも、五・三〇事件は反英と同様に反日の運動でもあって、書院生の母国である日本とイギリスとは中国において「類似した立場」にあり（後藤 2006: 263）、とくに1920年代の中国においては、細谷やニッシュがいうように日英の政策に「見解の一致点」が多かったことが（細谷 1982: 9、ニッシュ 2000: 255）、書院生を後年に見られるようなイギリス批判に向かわせなかった背景であると考えることができよう。

一方、日本の植民地経営については、上海から香港まで白山丸で同乗した「船中四日の間一言の挨拶さへしない、いやに老人じみた日本人」から、「今までの南洋方面は無智な日本人に依り低級な発展をして来たが、今後は是非共、貴方達の様な学問のお有りなされる方々の活躍期ですぞ」なる激励を受けるなど（大旅行誌 20: 317）、イギリスに及ばないものとして認識されていることがわかる。

4) 五・三〇事件は、1925年2月の上海における日系紡績工場へのストライキに端を発し、5月30日に行われた中国人の反日デモに対して共同租界のイギリス官憲が発砲したことによって多数の死傷者が出た事件であり、これを機に全国各地にデモやストライキが広がった。五・四運動に次ぐ大規模な反帝国主義運動であり、日本とイギリスに対する反感が高まった。広州の租界であった沙面では、1925年6月23日にデモ隊に対してイギリス軍が発砲し、多数の死傷者を出した沙基事件が勃発したことにより、広東政府が香港封鎖を行い、香港の中国人労働者は広州に退去し、香港ストが1年半にわたって続いた。

2. イギリスに対する疑念の萌芽と中国人経済力の認識：1920年代末～

1920年代末になると、書院生の記述に、ようやくイギリス植民地政策への疑念が少しずつ現れるようになる。

1929年に香港を訪れた26期生は、イギリスに対しては「少数による多数支配」と云ふ英国人の虫のいい経済政策」として（大旅行誌 21: 15）、その植民地政策のあり方に疑念を抱いている。欧米列強に対する反感という点で、書院生の「アジア主義」的感覚を感じさせる。こうしたイギリス支配に対する疑念は、香港の将来に対する懸念にも繋がっていく。

1931年に香港を訪れた28期生は、「1925年の封鎖事件」を直接の原因として、「一時世界に君臨した香港も今や衰運に傾いて来た」と記しているし（大旅行誌 23: 79）、翌年に大旅行を経験した29期生は、「香港はきれいな街」ではあるが、地積が小さいために「最早発展の余地が」なく「水に乏しい」ことから「将来ある港ではない」との評価を下している（大旅行誌 24: 421-422）。

しかし、従来のイギリスへの憧憬が姿を消したわけではない。イギリスの香港支配を「虫のいい経済政策」と評した26期生はそれと同時に、「憧憬の香港」は、「全くお伽話の国へ来た様な柔かい感じ」があり、「対面の九龍又美麗に、高壮な洋建築群をなしながら見もせぬ英国を思はせ」（大旅行誌 21: 39）、「保守的で厳格なブリティッシュ気質に作られたコロニー文化であるからで、アメリカニズムではない、クラシツクな明色を持った市港である」と評価しており（大旅行誌 21: 19）、27期生も香港島を周遊して道路や設備を目の当たりにしては「支那を離れて、遠く欧州の地を疾駆してゐる興奮を感じて」いる（大旅行誌 22: 238）。

28期生は、1931年の香港観察に基づき、「資本主義経済の縮図」としての「蜂の巣の様なビジネスストリートの殷盛」や、「ピークの頂上迄立ち並んだ建物の驚異」に、「之総て堅実なる英国国民性の発露」を見るとともに（大旅行誌 23: 159）、香港が「英国の王冠中最も耀ける宝玉となつた」理由として、「自由貿易制度の採用」のほか、「英国が領有以後歴代聡明の総督を任命したこと」や「英国の国民性は能く勤勉にして低廉の労働に耐ゆる支那人民を利用し共同に事業の発達を図りたること」、「英人が植民地統治の才幹に富んで居る事」、「英国は香港に於て印度其他東洋植民地に於て試みたる実地の経験を応用した事」、「英国は香港領有以前東印度会社を経営せる当時より海運界銀行業に非凡の人物を輩出せしめ香港を中心として活躍し牢固の地盤を造つた事」を挙げており（大旅行誌 23: 74-75）、イギリス人の香港経営を讃えている。

このような見方は、1933年に香港を訪れた30期生にも共有されており、「よく山上まで開拓して家を建て埋立切崩し築港等に全力を注いで、現在観るが如き美麗余りなき一大文

明都市を生み出したことは、全く魔法にも似たる努力の結晶」であり、「堅忍不拔着々建設の実をあげ来つた根強い英国人の努力が、遂に今日の香港を完成したのだ」と、香港の発展に「英人の不撓不屈の精神」が見出されている（大旅行誌 25: 459-460）。

また、28期生の記述によれば、「翻翻としてひるがへるユニオンジャツクの威容は傲然として港頭を圧して」おり、「港内に頑張る灰色の怪物は凶暴なる支那民衆の如何なる策動をも、動きをがつつと圧へつけて居る」として（大旅行誌 23: 159）、書院生が明らかにイギリス側の視座に立って、中国人の動きを見ている様子が読み取れる。この点、後藤（2006: 263）が指摘するように、当時の中国において日本とイギリスが「類似した立場」にあったことによる視座のあり方と考えることができよう。1930年代前半の書院生は、「アジア主義」というよりも欧米列強に近い視座に立っていたということもできるだろう。

一方、日本に対しては、1929年に香港を訪れた26期生は、「日本人は何処へ行つても暈と障子がなければ住めない」、「世界主義を知らない時代後れの国民である」と（大旅行誌 21: 15）、日本人の適応力のなさを批判している。

1932年、日本人の広九鉄道での移動すら危険なほどに「南支排日の激烈な時」に香港を訪れた29期生は（大旅行誌 24: 426）、「思ふに日本の殖民者は射幸心強く熱烈なる拝金者流の弊がある。ステップバイステップ主義の支那人、台湾人に競争圏内から次第に投げ出されつつあることは満洲台湾等の殖民地が雄弁に之を物語つてゐる。香港も亦この例外に漏れてはゐなかつた。殖民者の処世哲学を改変せざる限り恐らくは成功といふ文字を見出すことは出来ないだらう」と記し、日本の植民地政策が深刻な「殖民哀史」となっていると述べる（大旅行誌 24: 449）⁵⁾。

28期生は、そうした香港在住日本人として、15年近く米国にて按摩をしていたという香港の日本人カフェー主人に出会っているが、彼の「君太平洋は完全に日本のもんだよそして其処は今や世界の宝庫なんだ、が米国が何としようが英国が何と言はうが完全に日本のもんだぜ。君確かりし給へ。日本の海軍の総動員で網の目を張れるんだ。そうなつたら他の国が如何にじたばたしたつて大丈夫なんだから。うふふ……」という言には、「変な奴」、「誇大妄想狂」、「淋しき英雄」と評しており（大旅行誌 23: 350-351）、1930年代前半の書院生が日本の植民地経営能力に大きな不信感を抱くとともに、「日本を盟主として団結したアジアの建設」というような「アジア主義」的目標を共有していないことがわかる。

こうして見ると、イギリス支配への疑念の萌芽は、中国における日本の影響力の増大とは必ずしも直結していないようである。むしろ、この時期になると、これまでの『大旅行

5) 30期生は、上海と香港の日本人について、次のように述べている。「香港の日本人の生活は上海の日本人の生活とそっくりだ。その日その日あそんで暮す所謂有閑サラリーマンと、苦しみにあへぎつつある貧乏商人。そしてその中間が何も無い。植民地の生活とはみなあんなものかと考へさせられる」（大旅行誌 25: 460）。

誌』では主体としては注目されてこなかった中国人に対する言及が現れてくることに気付く。26期生は、ケネディ・タウンの中国人商店では大通りに「商号の旗と一緒にボロ洗濯物を日干しする勇敢性」があり、「この粘着力こそコミュニストや工人等のボイコットよりも英国の経済的コロニー統治力を脅かすものである」と記しており（大旅行誌 21: 15-16）、香港における中国人の主体的な役割を認めている。

27期生は、「英国は香港建設には成功して居る、が、年々其の基礎を堅めて行く支那人の潜航的経済発展力に耐えられるであらうか？」と疑念を投げかけ、「生の為に戦ふ事」については「英国人よりも支那人の方が強い様で」あり、「今や香港は大英国の支配権と支那人の経済力との葛藤があの小さい島を中心として闘争を続けてゐるのである」と述べ（大旅行誌 22: 255-256）、中国人の力が将来的にはイギリスの植民地勢力を圧倒していくであろうことを示唆している。

以上のように、1920年代末から1930年代半ばまでの時期には、イギリスの香港支配に対する手放しの称賛のみに留まらず、イギリス人に並ぶプレイヤーとして中国人の主体性を認めるようになり、中国人の経済力がイギリスを凌駕していく可能性を描くようになる。これは、1920年代の中国ナショナリズムの急成長により、日英両国が「既得権益が脅かされていると考えるようになった」ことと関係していよう（後藤 2000: 283）。その一方で、日本人は香港における主要なプレイヤーとは認識されておらず、日本を盟主として欧米支配を駆逐しようとするような「アジア主義」的な感覚は、香港を舞台としては見出すことができない。

3. イギリス批判と日本影響力増大：1930年代半ば～

書院生のイギリス支配に対する批判的な視線は、1930年代半ばになると、より明確に立ち現れてくる。

1934年に香港に上陸した31期生は、香港は「兎に角、英国人の威張つてゐる町」であり、「彼等が世界の歴史上一番卑劣な野心から起した戦争で支那から割譲させた」と（大旅行誌 26: 206）、アヘン戦争を批判している。1936年に香港を訪れた33期生は、香港の「人工美の中に東洋人としての反抗を覚えさせられ」ており（大旅行誌 28: 434）、「この貧乏なる東洋に彼等白人が余計に食ひ下つてゐることは如何にしても許さる可きことでない」と思っている（大旅行誌 28: 467）。山を下りる際にパッカードやナッシュ⁶⁾の疾駆に遭い、「いまいましき限り」という感を抱き、市街を見下ろし船舶を眺めても「俺の自由になるものは見渡す限一つだになきか！」と「ヤケに誰かをブン撲つて見たく」なったり

6) パッカードもナッシュも、アメリカの自動車メーカーである。

もする（大旅行誌 28: 468）。欧米人の香港支配に対して、「東洋人」として、行き場のない怒りを感じていることがわかる。十字路において交通整理をする警察官を見ても「畜生！ 貴様等毛唐の走狗だぞ！」と「小面憎」く思い、そのように英国人に支配されている香港の中国人に対して「汝等何故目を覚まさぬ！」と苛立ちを募らせていく（大旅行誌 28: 468）⁷⁾。1937年に大旅行を経験した34期生は、「一世紀に垂んとする搾取の足溜り場として英国が今日の地盤を築いた香港」と記し、「搾取」という語を用いている（大旅行誌 29: 200）⁸⁾。

1938年に香港を訪れた35期生は、「領有当時は毒蛇、毒虫に禍され悪疫、風土病に苦しみ、香港放棄論さへ唱へられたこの島を、いま視野に展開されてゐるかくも絵のやうな文明都市にしたのは、実に英人の堅忍不拔な努力であつた」というところまでは、1930年代半ばまでのイギリス植民地経営賛美的感慨と変わらないが、その後には「英国の海賊的帝国主義に対しては、言ひ知れぬ反感を抱くと共に、彼等の撓まざる努力と熱意に対しては、深い敬意を捧げないわけにはゆかぬ」という文が続き、さらに先輩の住宅から見える海軍工廠を眺めながら、「英国は彼等の祖先が東洋に残した遺産を護るのに必死である。一孤島を現在の香港にするまでに英人が注ぎ込んだ費用は実に莫大なものであつたであらう。然しその巨額も、今日まで英人が東洋から搾取したものに比すれば、その何パーセントにしか過ぎない」といい（大旅行誌 30: 306-307）、1930年代末にはイギリスの香港支配に対して「深い敬意」と同時に「言ひ知れぬ反感」を表明する必要があつたことが窺われる。

1934年の香港を歩いた31期生は、香港におけるイギリスは「日本に圧迫されてゐる」から「近頃はあまり振はぬ様」であると述べており（大旅行誌 26: 206）、1930年代半ば

7) このような苛立ちは、1930年代後半以降、『大旅行誌』の随所に見ることができる。たとえば、1939年の仏印にて、「香港婦女会献納」、「香港童子軍献納」と大書された大型トラックによる抗日映画の宣伝を目撃した36期生は、こうした抗日の中国人に対して、「誤まれる認識」にあると考え「哀れと思ふと同時に何か恐ろしい予感に襲はれ」ている（大旅行誌 31: 341）。

8) 34期生は、広州の沙基事件の跡に立つ1926年建立の「母忘此日」碑においても、中国人がイギリスと提携して抗日をする非を次のように訴えている。「支那四億の民よ、此の日を忘れても此の碑を忘れることがあつてはならない筈だ、香港が九龍が鼓浪嶼がお前達の手からもぎ取られて行つたのは一体誰のお蔭なのだ、本当にお前達が国を愛するならば力をお前達自身の内に見出さねばならないのではないか。此の碑を忘れて英国との抱合いに懸命になつてゐる——日本に抗せんが為めに——、夷を利用する事によつて夷を制し得ても、その事が決してお前自身を成長さしはしない。」（大旅行誌 29: 407-408）。この沙基事件の碑については、たとえば1928年に広州を旅した25期生や1930年に旅した27期生の記述にも見ることができるが（大旅行誌 20: 38, 22: 240）、この時期には何らかの感慨が示されているわけではない。なお、1927年に広州を旅した24期生は、6月23日に広州に居合わせているが、折からの「対日山東出兵反対」を焦点とした「猛烈」な「排外運動」のなか領事館から外出を控えるよう指示され、慎重に沙面に向かい磯谷・和知両駐在武官を訪ねている（大旅行誌 24: 525）。沙面などの租界に対する印象については、稿を改めて論じる必要がある。

以降のイギリスに対する書院生の反感の背後には、中国における日本の影響力の増大があったと見てよいだろう。1930年代半ばになって、日本が香港におけるプレイヤーの一角として書院生に認識されるようになってきたことが読み取れる。

その一方で、1930年代半ば以降、日本の満洲等への進出に対抗して、イギリスが香港支配を強化しているという記述も多く見られるようになる。

1936年に大旅行を経験した33期生は、「香港への憧憬」は感じながらも、パスポートを忘れて「乱暴な取扱ひ」で取り調べを受け、即刻立ち退きを命じられ、「香港は完全に英領である」「南支特に香港付近に於ては英国の勢力の強いのに驚かされてしまった」という（大旅行誌 28: 300-301）。

このような体験的実感に基づく香港におけるイギリス勢力の伸長は、33期生によれば次のような背景による。華南において「鉄道建設が着々進められ、之れに要する巨額の建設資金は英国の投資に依ることは明か」であり、「かくて英国の南支に於ける経済的支配権は滙豊銀行の金力と鉄道支配とに依つて尽く英国の掌中に帰せんとしつつ」あり、「満洲及び北支の経済覇権を完全に我が国に掌握せられ、又長江一帯のその経済的地位をも徐々に危くされつつある英国としては、最後の一线を香港に食ひ止め、一方ヴィクトリヤ・ピークの山中に益々堅固なる要塞を築き、九龍に飛行場を作り、香港駐在兵を増加し、香港の軍備を最大完備すると共に、他方にはその巨大なる資本力に依つて南支の経済覇権を完全に自国の掌中に収めて置かんとするは無理からぬ」ことであるという（大旅行誌 28: 467）。

こうしたイギリスの香港支配強化に対し、書院生は日本の関与をどのように考えたであろうか？

33期生は、「日本は躍進しなければならぬ。最後の目標さへ誤らず、正しいものなれば、「帝国主義」と云はれても「侵略主義」と云はれても、又誇大妄想的な一部の中国人の「抗日救国」などに眩惑されることなく、只管目標に向つて力強く進まなければならぬ」と考える（大旅行誌 28: 469）。前述のように1931年の香港滞在に基づく記述において「誇大妄想」と評価されたのは、海軍力によって太平洋を日本のものにしてしまおうという在香港日本人であったが、1930年代半ばには「抗日救国」を唱える中国人こそが「誇大妄想」とされるようになっていく。中国人の抗日機運の高まりのなか、書院生はイギリスの「帝国主義」と日本の「帝国主義」が一見同じに見えても異なるものであると認識されていることがわかる。しかし、両者がどのように相違するのかについては、明確にはされていない。

1937年に大旅行を経験した34期生は、「外国勢力を駆逐せざる限り、東洋の平和は難からん」と大旅行中に「痛切に感じさせられ」、「益々多事多端なる」日本の前途を思うのであった（大旅行誌 29: 406）。ここには、欧米勢力のアジアからの駆逐と、それに向けて

日本が積極的に活動すべきとする「アジア主義」が読み取れる。

このような日本について、書院生は、フィリピンから香港に向けて乗船した北野丸において、船尾にはためく日章旗を見つめ、日章旗が自分を「力強く抱きしめてくれる」ような感覚を抱き、「私どもの背後には強力な日本があつた」という言に共感するようになる(大旅行誌 28: 542)。これまでには見られなかった日本の国力への自信が、1930年代半ば以降に書院生に観察されるようになるのである。

では、書院生は、中国人に対しては、どのような感触を得ているのだろうか？

35期生は、香港の町を歩きかう中国人が「極度に欧化され」「狭い海を隔てた直ぐ対岸では自分達の国が、国を賭して戦争してゐることも知らぬ顔である」ように見えることから、「支那の有産階級は、殆ど難を避けてこの周囲二十八哩足らずの小さな島に、一身の安全と享楽を求めて慕ひ集るのである」と嘆き、「この意味で香港は、英国の植民地であると共に支那人自身の植民地でもあるわけだ」と見る(大旅行誌 30: 308)。したがって、「香港の支那人にとって、南京が陥落したとか、徐州を放棄したとかいふニュースは、白系ロシア人が追はれた故国に対するよりも、もっと無関心で居られるかも知れない」と考える(大旅行誌 30: 308-309)。

しかし、スター・フェリーで乗り合わせた貿易商の若い日本人の、「日本軍の広東爆撃が始まってからといふものは、支那人の態度がガラリと変り」、2、3か月前には得意先から歓迎されたのに、広東爆撃が始まってからは相手が腹を立てて「てんで寄せつけない」ようになってしまったという発言からは(大旅行誌 30: 315)、香港に滞在する日本人貿易商の取引先になっている中国人が、必ずしも書院生たちが見たように中国大陸の動向に「無関心」な訳ではないこと、香港を含む華南における中国人の日本への反感の高まりがあったことも読み取れる。

以上のように、1930年代半ば以降、書院生は中国における日本の影響力拡大を背景に、イギリスへの批判的視線を強めていった。この動きは、1936年8月24日付の『モーニング・ポスト』紙が報じたような、イギリスによる中国での幣制改革への協力や鉄道建設権獲得によって「日本における反英運動が急速に成長してきたこと」(松浦 2010: 310)とも重なっているであろう。1937年における日中戦争の勃発も、幣制改革によって中国の財政が「イギリス資本の手中に制せられる」結果を招いたことによるものとの見方があったことを、松浦は指摘している(松浦 2010: 311)。

また、日本の帝国主義がイギリスの帝国主義とは異なるという見方も打ち出されるが、どのように相違するかは明確にされない点は、近代日本の「アジア主義」や大東亜共栄圏思想が「アジア諸民族との連帯を訴え」つつ実は日本の「大陸侵略政策を隠ぺいする役割」をもっていたことと(野原 1960: 6)、軌を一にするものであろう。

書院生は、こうした考え方に立脚して、中国人は反日であるべきではなく日本と提携し

てイギリス帝国主義と戦うべきとするが、実際には中国人がイギリスと協調して抗日に邁進する現実には苛立ちを募らせていくのであった。

4. 日本における排英運動高潮期から香港日本占領期：1939年～

1939年7月、日本では陸軍の「懲滯」と内務省の「奨励」によって、「激烈な排英運動」が起こり、7月14日の東京における反英市民大会では6万5千人が参加したという（白井：145-146）。

この時期に至っても、イギリス植民地経営への賛美と、日本がそれを見習うべきであるとする言説が消えたわけではない。

1939年に香港を旅した36期生は、「香港の美観は英人の東洋進出の一大努力に因る結晶に他ならぬ」とし、欧米人の「美術的高尚な精神と努力」に対して「異郷の地に、異民族の地に進出発展せんとする、これからの日本人も、かかる点をも意に留むべきではないだらうか」と記す（大旅行誌 31: 279）。

その一方で、1942年に日本占領下の香港を経験した40期生は、「流石に英国百年の対支政策の根城だけに、小さい乍らも極度に完備せる街の構成に驚きながらも、街角に「辻姫の群を見」ることによって「ここにも亦哀れな生存競争の敗者の群」を見たし（大旅行誌 33: 354）、また、「島のある地点から上は中国人の居住を許さぬといふ事実」に、英国人の「支那人とは一緒に住まぬぞよ、俺とお前とは身分が違ふ」という気持ちを見て「深い憤りの念」を感じている（大旅行誌 33: 326）。イギリス支配の負の側面を意識していることがわかる。

この時期の書院生は、大旅行先で見る日本軍の姿に「力強さを感じ」る一方（大旅行誌 32: 280）、「敵軍」の軍需品が香港やマカオといった「外国権益の土地から」運ばれて行ったことを指して「支那全体を身体とすれば香港の如き地点は皮膚にある傷口で」と評している（大旅行誌 32: 282）。日本の香港占領以前には、「香港と云ふ敵性島」という表現も登場する（大旅行誌 32: 286）。

さらに1942年になると、「本年1月26日皇軍の香港完全占領以来」、「香港在住の中国人、国難をよそにアメリカナイズされた享樂をひたすらに追ひ続けた彼等も、完全に近代装備化された皇軍が、その比類なき攻撃精神によつて驕子英兵を瞬時に覆滅し去り、百歳彼等の頭上高く君臨したユニオンジャックが引き下されて、凜として日章旗の翻るのを仰いだ時、その深い迷夢から翻然として醒めざるを得なかつたであらう」と記し、「今や皇領植民地香港は完全に皇土香港として更生し」（大旅行誌 33: 336）、「本年初頭戦塵の巷と化した香港の復興は、我が国の手によつて、遂にここまできたのである」（大旅行誌 33: 341）と評するに至る。香港の位置付けについても、いま「大東亜共栄圏の一環として」、

「南支の玄関を扼」し、「南洋物資の交通」においても「共栄圏下物資の中継地としての意義は失はぬであらう」と、日本を盟主とする「大東亜共栄圏」における将来に続く重要性和意義を見出している（大旅行誌 33: 337）。

「為政者」としての日本の役割については、磯谷廉介総督の香港統治の抱負を、岩波新書『香港』の著者小椋広勝から「日本軍政下にある皇土香港の統治を理想的に行ひ、中国民衆の覚醒を促さなくてはならぬ」と聞き（大旅行誌 33: 338）、先輩からも「磯員総督の香港統治の根本方策」として「この香港を南支に於ける和平運動の根源地として盛り立てて行かねばならず、「英国のクラウンコロニーとしての香港から、我が皇土香港への再出発は、支那侵略の拠点から、大東亜共栄圏建設の一環としての和平運動発祥の地への転換であらねばならない」と聞いている（大旅行誌 33: 355-356）。イギリスは中国への「侵略の拠点」として香港を利用したが、日本は「侵略の拠点」ではなく、あくまでも「大東亜共栄圏建設」の一環として「和平運動」の拠点とするというのである。

これに対して書院生は、香港ドルの「抜打的切下げ」や、「敵性銀行清算事務所のやり口」、「押収倉庫品の所有権申告」など、上述の「理想」に反する現実の矛盾を突きつけるが、先輩は戦争という現実や復興への過渡期であることを理由として「已むを得なかつた」というのであった（大旅行誌 33: 356）。この先輩の回答に対して、書院生は「目の小さな利害は無視してでも、支那民衆の心をしっかりと掴んで行かなければならぬ」と考えている（大旅行誌 33: 356）⁹⁾。日本が「侵略」ではなく「和平」を生み出そうとしているという言説に対して、日本による統治の矛盾を観察・指摘し、中国人民衆との連携を考える点に、書院生の観察眼を見ることができる。その一方で1939年以降の書院生たちは、日本の香港支配の具体的方法に疑問は感じつつも「アジア主義」的な「理想」は共有しており、香港での演奏会で「国歌「君が代」に思はず臉の熱くなるのを覚へた」のであった（大旅行誌 33: 340）。

結び

以上、大正期から「大東亜戦争」期にかけての書院生による香港観察の視座に、「アジア主義」がどのように立ち現れ、また変容していくかを、とくに対イギリス認識を軸にして観察してきた。

1920年代末までは、1925年の五・三〇事件によって中国人の対イギリス認識が悪化し

9) 広東の衰退に、「之をよりよく指導し厚生広東に努力する事が、我々日本人の為政者に課せられた使命でなければならぬ」とする36期生の感慨も（大旅行誌 31: 274）、同様の感覚から生じているといえよう。

でも、書院生のイギリス植民地支配に対する賛美には変化は見られなかった。これは、当時の日本が、中国においてイギリスと「類似した立場」にあったことと関係していよう。

1920年代末になると、イギリスの植民地支配に対する称賛は続きつつも、中国人の主体性にも目が向くようになるが、香港における日本の影響力への評価はほとんど見られない。

1930年代半ばには、中国における日本の影響力の増大を背景に、イギリス植民地支配に対する批判的視線が明確になり、中国人が日本と協調してイギリス帝国主義に抗すべきであるのに、実際にはイギリスと協調して抗日に邁進することに苛立ちを募らせていく。ここには、日本を盟主としてアジアから欧米列強を駆逐しようとする「アジア主義」が明確に観察できる。

日本において排英運動が高潮し、さらに「大東亜戦争」の勃発によって日本が香港を占領すると、書院生は「アジア主義」的な「理想」を共有し、中国人民衆と提携して「大東亜共栄圏」建設に心を躍らせるのであった。

後藤は、戦間期とくに1922年日英同盟廃棄後の日英関係が対立的であったとする従来の概説的理解に疑問を呈し、日本とイギリスの中国における「類似した立場」を前提としたうえで（後藤 2006: 263）、「攻撃の標的として一度に一つの国のみを選り出すという」巧みな国民政府の対外政策により、日英協調は「積極的に避けるべきものとなった」と述べているが（後藤 2006: 261）、書院生の香港観の変遷を観察すると、中国における日英関係の良好さに基づいて1930年代半ばまではイギリス植民地支配を称賛しているが、それ以降は国民政府が日本のみを攻撃の標的として選択したことにより、書院生はイギリスによる植民地支配を批判するようになり、中国人の抗日に対して苛立つようになっていくことがわかる。また、「アジア主義」の理念自体は、書院生に共有され、それ故にこそ、「大東亜共栄圏」を共に支えるべき中国人が、イギリスに対してではなく日本に対して抵抗し、「大東亜共栄圏」の理想を共有しないことが癪に障るのであった。書院生も、1930年代半ば以降は「アジア主義」の強い影響を受けていたのである。

付記：本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティとの接触の実像」（課題番号：15K01896）および愛知大学人文社会学研究所「南方における近代日本青年の足跡」研究会による成果の一部であり、2017年3月、本稿に登場する地の多くを実際に訪れることができた。なお、本稿の資料については、塩山正純氏より整理・提供いただいたものを使用させていただいた。記して感謝申し上げます。

史料

東亜同文書院『東亜同文書院大旅行誌1～33』（愛知大学によるオンデマンド版2006）

参考文献

- ベスト, アントニー 2000 「対決への道：1931-1941年の日英関係」木畑洋一ほか編『日英交流史1600-2000 2 政治・外交Ⅱ』東京大学出版会
- 後藤春美 2000 「1920年代中国における日英「協調」」木畑洋一ほか編『日英交流史1600-2000 1 政治・外交Ⅰ』東京大学出版会
- 後藤春美 2006 『上海をめぐる日英関係1925-1932年：日英同盟後の協調と対抗』東京大学出版会
- 細谷千博 1982 「日本の英米観と戦間期の東アジア」細谷千博編『日英関係史1917-1949』東京大学出版会
- 井上寿一 2016 『増補 アジア主義を問いなおす』筑摩書房
- 加納寛編 2017 『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
- 木畑洋一 2000 「失われた協調の機会？：満州事変から真珠湾攻撃に至る日英関係」木畑洋一ほか編『日英交流史1600-2000 2 政治・外交Ⅱ』東京大学出版会
- 松浦正孝編 2007 『昭和・アジア主義の実像：帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」』ミネルヴァ書房
- 松浦正孝 2010 『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか：汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会
- ニッシュ, イアン 2000 「同盟のこだま：1920-1931年の日英関係」木畑洋一ほか編『日英交流史1600-2000 1 政治・外交Ⅰ』東京大学出版会
- 野原四郎 1960 「大アジア主義」『アジア歴史事典6』平凡社
- 塩山正純 2017 「『大旅行誌』の思い出に記された香港：大正期の記述を中心に」加納寛編『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
- 竹内好 1993 『日本とアジア』筑摩書房
- 白井勝美 1982 「日本の対英イメージと太平洋戦争」細谷千博編『日英関係史1917-1949』東京大学出版会